

## 近世城下町の経営と計画に関する研究

著者	阿部 和彦
号	1497
発行年	1993
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/10304">http://hdl.handle.net/10097/10304</a>

氏 名	阿 部 和 彦
授 与 学 位	博 士 ( 工 学 )
学位授与年月日	平成 6 年 3 月 16 日
学位授与の根拠法規	学位規則第 5 条第 2 項
最 終 学 歴	昭和 44 年 3 月 東北大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
学 位 論 文 題 目	近世城下町の経営と計画に関する研究
論 文 審 査 委 員	東北大学教授 松本 啓俊    東北大学教授 伊藤 邦明 東北大学教授 吉野 博

## 論 文 内 容 要 旨

本論文は我国都市計画史上、画期的事業とされる近世城下町の形成に関する研究で、1・2章では城下町の経営構造と形成過程、3・4章では武士団の城下町への集住過程と居住域構成、5・6章では都市形態の計画手法について分析を行い、近世城下町の空間的特性を成立期における都市経営と計画性に着目して解明しようとするものである。

### 第 1 章 秋田藩成立期における藩営普請・作事の体制について

近世初期の秋田藩につき、江戸・領内・城下町久保田と、広域にして多岐、膨大な開発事業を遂行する体制を、担当者の役割、経営方式、経営力のあり方などについて、構造的に分析する。

藩主佐竹義宣は普請（土木工事）・作事（建築工事）全般にわたる起案者であり、工期を決し工程を統御する。義宣の指令は図面を用い詳細具体的であり、先進的高水準の技術を指導的立場から提案し創意に満ちたものであるとともに、合理主義的発想から現実的対応、工事の迅速性や工事量の拡大を尊重し、又、段階的修正工事を度々敢行することによって、自在に計画の全体的調和や都市空間の高質化を計っている。

家老は藩主側近と国元にあつて藩主の意向に沿い、計画地の地形環境調査、実地に則した基本計画の立案、造営組織の編成、工事現場の監督など、藩営事業を全体的に統轄する最高指揮臣僚である。普請役を課される家臣団は、大規模事業が計画されると、全階層にわたって運営組織に編入され、身分・家格に応じて奉行職などを任じ工事遂行に奉仕する。普請役は臨時業務であるが、大工奉行・板壁奉行・葺萱役・御材木役などの作事関連職は恒職化しており、相役の家臣が職人支配と

資材の調達を安定的、継続的に司どっている。

藩営普請・作事の方式は、一つに競争入札による請負制が一般化しており、藩費を支出する民間業者への工事委託によって、高度な技術の導入、臨時動員を可能にしている。藩直営の作事を管轄・職掌する召抱えの御大工は約20人前後で、大部分が常陸からの転封随従職人で、16世紀初頭以来、佐竹氏に仕える譜代の大工が最上層を占めて中心となり、常陸代召抱えの浪人出身大工と少数の秋田出身大工を加えた構成となり、ほかの作事関連職人頭も常陸出身者が職種ごと在地職人を集団的に統轄する寡頭支配権を公許されている。

久保田城下の番匠町に居住する町方大工は、藩当局と入札・注文・手間請負などで契約関係を結び雇傭される。その出身は旧領主秋田氏の城下、湊に居住していた大工を中心とする集団である。一般的役夫は家臣・足輕など輕禄士・町人・全領の百姓と全階層にわたり、その徴達体制が法制化され、資材の調達体制は全領的税制と財政制度の確立、藩の超法規的強制、山川野役の独占などによって強化される。以上、藩体制の経営体としての整備が城下町の大規模計画を円滑に推進することを可能にした要因であることを明らかにした。

## 第2章 秋田藩城下町久保田の形成過程

常陸から少人数の家臣を伴って秋田に移封となった佐竹氏が、新城下町久保田をいかに経営して完成に導くかを、家臣の形成と城下の空間的展開を関連づけながら説明する。

第1期（慶長7～11年）の久保田は地形環境に改造を施さず、町人町の成立もみない転封随従直臣団による小規模な集落として計画されている。この家臣がのちに佐竹家藩政の中核を占有する母集団であることを明示し、久保田城下の原形を復元して従来の諸説の誤認を解いた。第2期（慶長12年～元和4年）の計画において久保田は、河川の付け替えなど地形環境の改造が施され、町人の集住と家臣団の充実により大規模な拡張がなされ、第1期久保田の集落構成を改変して都市空間的に身分制秩序を具現する内町（侍町）・外町（町人町）制を確立するなど、城下町としての基幹を決している。第3期（元和5年～寛永年代）には領内諸城の破却と支城主級大身の城下集住が達成され、仙北給人の城下吸収、組付の下級家臣の城下周縁部における集団居住域の計画実施と、一層の規模拡大をみるとともに、城下の住民構成が身分的に複雑、多層化する。城郭施設の改築と増築、再開発をとまなう大身屋敷町の新規整備、街道筋町並の二階造への改造等々、従前の景観を一変する修景計画が敢行されて、城下町久保田は、内実の質的向上が計られて藩府としての体裁を整える。以上、久保田城下は家臣団の充実とその統制の強化にとともに規模を着実に拡大するとともに、既存街区の再編・修正・建替が敢行されて都市的体系を段階的に充実してゆく柔軟性に富む経営がなされていることなどを明らかにした。

## 第3章 秋田藩領支城下町・在郷給人町の構成とその居住域制

秋田藩領では一国一城制下にも関わらず、久保田城下のほかに領内要所の支城下町・在郷給人町に組下（本藩の直臣）等の家臣団が配置されて集居している。この支城下町・在郷給人町は、所預（城代）居館・所預家中・組下給人（複数の支配系統を含む町もある）・町人町で構成されるのが典

型で、中には組下給人衆と町人町のみの単純な構成の町もある。集落構成に特徴をもたらす組下給人衆の出自は二系統からなり、一つは戦国期末に没落する常陸代佐竹領周辺の大名・国人とその旧臣の浪人衆で佐竹家に召抱えられる新参家臣、一つは佐竹氏旧領の在地に分散居住していた地頭層で、惣領制的な同族団から一揆・洞と称する広域地縁集団を結成して集团的に与力として軍陣に加わるようになる譜代の家臣である。戦国期末、この二系統の家臣は領境の要衝、支城に派遣され、在番衆として共同して常駐する。秋田移封時には、常陸代の在番地名を冠する同郷团的集団性を保持して領内各地の支城下・在郷給人町に配される。組下給人衆は各町において、ほかと入り混ることなく出自ごとに同一街区に集住し、基本的にその定住性・集団性を崩すことはなかった。組下給人町は久保田城下の旗本家臣団とは基本的に異なる編成原理を有し、支城下町・在郷給人町における計画単位街区を形成していることを明らかにした。

#### 第4章 東北地方城下町の初期計画と侍町の住民構成

近世城下町形成初期の主要な計画的課題は、在地の武士団をいかに城下町に集住させ得るかにあり、特に東北地方の旧族大名にとって旧制の打破は至難であった。鎌倉時代以来の居付きの大名で、同領内の遠隔地に居城を移転した南部氏の盛岡城下町の経営について検討し、盛岡城着工年代を従来の慶長3・4年説を覆し、天正20年の朝鮮出兵時の国元でのこととし、南部氏が盛岡城の着工を契機にして全領の家臣団に対し、等しく軍役・普請役を課す体制を一挙に確立したことを明らかにした。南部信直代から着工される盛岡城と城下町では、次代利直に付属する性格が顕著であること、城下内丸は城下町経営基地的性格を経て南部一族・大身専住区に変貌すること、盛岡城着工時から慶長年代後半にかけての盛岡城下周辺地域の公地化の過程、元和年間初頭の城郭の整備、大身家臣を含む給人衆の盛岡集住の過程などを実証的に明らかにした。

東北地方の城下町、戦国期蘆名氏代黒川・元和期最上氏代山形・正保期上杉氏の米沢・南部氏の三戸と正保期盛岡・譜代大名酒井氏の鶴岡をとり上げ、城下への家臣集住制の形成過程をみる立場から、城下三の丸の侍衆の構成を比較検討し、その集住様式から大名の近世大名化の過程と権力構造、領内支配体制を反映し、城下町の個性や時代性に関すること、旧族大名城下においては国人領主や一族・大身家臣屋敷が門口守護を擬制化するような三の丸内の個別・散在的配置から、城郭の中心性を明確にする大手筋や堀端片側町、さらには両側屋敷町へと凝集的計画配置に進展するとし、又、一般家臣団は戦国期の軍団編成などの集団性を温存する街区構成から、前代の旧制を解体して大名と個別に契約される拝領知行高などによる身分制的秩序に準拠する街区編成へと進展することなどを明らかにした。

#### 第5章 近世城下町の立地・形態特性とその計画手法

地方分権的権力者である大名によって短期間に集中的に計画された全国の近世城下町、約140ヶ所を対象に都市平面形態を正確に復元し、選地・平面基本計画・方位選定・計画基準尺度など基本的な形態特性を統計的に分析し次の点を明らかにした。

近世城下町はその40%強が古代国府想定地の近傍に立地し（国府想定地の約4分の3が近世城

下町に近在する), その平均距離は約6.8kmである。城下計画者が選地にあって国単位の治府所在地の伝統を重んじた結果であり近世城下町の目標とした都市像を象徴するものと指摘した。

城下町は未開拓地を人工的に地形改修して町割を施すが、河川の付け替え、高所削平と低湿地埋立てなど城下町の経営過程と当該地形環境に即応する合理的な開発が行われていることに共通性があることをみた。

城下町の平面構成と方位の関係をみると、北に城郭、南に町人町を配する都市形態、北上型が全体の1/3と最も多く、南上型がその1/6、東上型・西上型が各々北上型の2/3の数となり、近世城下町は古代都城制都市の多くが採った観念的な北上型都市像を脱し、平面構成において方位に対する現実的で自由な対応を行っていることを指摘した。

城下町的主要街路の採る方位に対する角度をみると、正方位（真北）を採る城下町はほぼ京畿と環瀬戸内海地域に限られ数も少なく（全体の10%強）、これら城下町の用地には条里制など先行地割が確認できるものが多く、近世城下町として正方位を新規に割り出した例は皆無に等しい。近世城下町の偏向する主要街路方向をみると、東偏型が全体の70%強（以下、正方位を除く）、西偏型が30%弱となり、特に、東偏角10度以下に顕著な集中がみられることから、近世城下町の路線の方位決定には、当時の磁北（17世紀前半5°E～10°E説あり）に準拠するなど簡便で融通性をもった対応がなされていたものと推測した。

近世城下町の規則的な街区の設計には、計画基準尺度として1町=40丈⇔60間⇔120m余が使用され、その1/2・2/3の縮小単位、2倍・2.5倍・3倍の拡大単位が基準長さとして頻繁に利用されていることを指摘し、路線割・町割・屋敷割の用尺が長い単位（6.5尺以上）と短い単位（6.3尺以下）を使い分けていることをみた。

## 第6章 仙台北下の空間律とその計画手法について

前章の城下町の形態分析を踏まえ城下町仙台を対象として近世城下町の空間律と計画性をより具体的に検討した。

仙台北下の外縁設定の手法を宗教施設の配置を通じてみると、城下周辺の高地、古来からの勝地、古蹟地が宗教施設用地として尊重され、在地系古刹が城下外縁に分散的に配される傾向にある一方、伊達家随従系の寺院は伝統的京制の方位構成を下敷きにするような出自・宗派による集合的配置が顕著である。

町人町の配置についてみると、仙台北開府当初は、伊達家随従の御譜代町6町が仙台北城に近い大町近傍に並列的に集塊する配置がとられ、在地系町人町の国分町・二日町・北目町などは、その外方向に距離をとって奥州街道沿に配される計画となっていた。のちに御譜代町の柳町・荒町が奥州街道沿に転ずることになって当初の計画原則は崩れる。

城下の主要な路線は城下周辺高地や特定宗教施設・古蹟地などを「見通」す方向を採用している。街区・町割を検討すると、街区長さは1町=40丈⇔60間を基準とし、侍丁が60間平方、3,600坪=1町を、町（町人・足軽）が60間×50間=3,000坪=1町の面積単位を基準に設計され、道路割から屋敷割まで「町」の単位を崩さない工夫がなされているとした。

仙台北下の計画は、当初から相当広い視野のもとに地域空間計画がなされているが、理念的な全体計画が薄弱な反面、整然とした計画則を有する並列的な計画単位を漸次打ち継いで完成に至っていることを指摘した。

付節として仙台北下の都市施設を記録する根本資料、「御修覆帳」に関する資料批判と御修覆制について検討した一文を沿えた。

## 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は近世城下町の都市計画的形成に関する研究で、城下町の都市空間的特性を、その成立期における都市経営のあり方、住人の配置方法、都市計画的作為に焦点をあてて精細に解明している。

第1章では、近世初期の秋田藩につき、藩主、家臣団・技術者・町人・農民が城下町の経営にあたってどのような役割をになったかを明らかにし、経営の指令・組織・方式や労働力・資材・資金の調達体制を構造的に解明している。城下町を経営する藩自体の経営構造を究明した本章は、従来、全く看過されていた分野であり、多くの知見を呈するとともに今後の城下町研究を深めていく上で基準となる業績といえる。

第2章では、著者新発見の資料を駆使して従来の諸説を正しながら、秋田藩久保田城下の形成過程を、家臣団の形成過程と城下の空間的計画発展を関連付けながら解明しており、従来、不明の点が多かった城下町形成初期の実態を明らかにするとともに、城下町の形成過程が、藩体制の整備に連動しており、城下町の面的拡大だけではなく、たびたび実施される修正計画によって都市空間の質的向上が計られる柔軟性に富んだ経営がなされていることなどが指摘されており、わが国都市空間の資質を考える上で貴重な知見が提示されている。

第3章では、秋田藩領内の久保田城下以下の支城下町、在郷給人町について、その集落構成を明らかにするとともに、各町に配された本藩家臣団の生成過程を詳細に明らかにして、本城下久保田との町編成原理の差異を究明している。城下町を藩領全域を見通して位置付けた本章の業績は今後の城下町研究の展開に指針となると考えられる。

第4章では、東北地方の主要な城下町の初期経営と侍町の住民構成を分析し、城下町への家臣団の集住様式は大名の権力構造と領内支配体制を反映して各城下町の時代性や個性を表出するとし、一般的には少数家臣の散在的配置から大多数の凝集的配置、街区的構成へと進展することを明示している。

第5章では、全国140ヶ所の近世城下町を対象にして、近世城下町の立地と古代国府との地理的近接性、城下町の水系や高所に対する計画的開発法、城下町計画における方位選定方法、城下町計画における基準尺度とその運用方法など、これまで指摘されなかった城下町計画則を検出している。

第6章では、前章にも準拠しながら仙台北城下の空間律と計画手法を具体的に解明している。

以上、本論文は近世城下町の研究に新たな学際的視点や計画手法を解明する方法を案出し、広い視野と詳細な分析を通じて、城下町の計画に関する多くの新たな知見を提供している。よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認める。